

西の魔女が死んだ

2008(平成20)年3月11日笹賞<角川映画試写室>

★★★



監督・脚本＝長崎俊一／原作＝梨木香歩『西の魔女が死んだ』（新潮文庫刊）／出演＝サチ・パーカー／高橋真悠／りょう／大森南朋／高橋克実／木村祐一（アスミック・エース配給／2008年日本映画／115分）

……中1のまいは今、田舎のおばあちゃんの家で魔女修行中。それは、登校拒否症となった心と身体を癒すためだが、その成果は？ 「おばあちゃん大好き！」に対する答えはいつも「I know」だった。しかし2年後の今、そう答える魔女はいない。ところが今、まいの目の前には……？ そしてまいの耳には……？

■ 魔女が倒れた！

「魔女が倒れた。もうダメみたい」との知らせを受けて今、車を走らせているのは、ママ（りょう）と中3になった一人娘まい（高橋真悠）。まいとママだけが魔女と呼んでいる大好きなおばあちゃん（サチ・パーカー）と暮らした2年前の様子が今ありありとまいの頭に甦ってくる。

なぜあの時あんな中途半端な別れ方をしたのだろうと後悔しつつ、今度こそ「おばあちゃん大好き！」と言わなければ。そうすれば、きっと昔のように「I know」とやさしく答えてくれるのでは……。

■ 魔女修行とは？

感受性の強すぎる子は扱いにくい。中学に入って間もない頃、学校へ行くのが苦痛となり登校拒否の症状を見せたまいのことを、電話でママはパパ（大森南朋）に対してそう言っていた。その結果、まいは魔女の血筋を引くという西の魔女＝ママのママ、イギリス人のおばあちゃんの家で転地療養＝魔女修行をすることに。

魔女狩り、魔女裁判と日本では魔女にあまりいいイメージはないが、イギリス人で



© 2008 「西の魔女が死んだ」製作委員会

あるおばあちゃんの言う魔女とは、知恵を磨き物事をきちんと見通す能力をもった人のこと。そして魔女修行とは、毎日規則正しい生活をするところからスタートするらしい。

おばあちゃんの日本語は丁寧でとても美しいし、いつも中1のまいと真正面から向き合っている。ジャムづくり、卵取り、野菜やハーブづくりなど大自然の中で規則正しい生活をする中、まいの心と身体は次第に快方に……。

ゲンジの方が大切……？

おばあちゃんが1人で過ごすのは山の中の一軒家だが、山の入口付近にはゲンジ（木村祐一）が父親と共に住んでいた。まいは無愛想なゲンジのことが大キライ。だって、初対面の時はママの車の中をのぞき込んでいたし、はじめて彼の家を訪れた時は「学校をサボって田舎暮らしとはいいご身分のお嬢ちゃん」と言われたのだから。

そのうえ、おばあちゃんの鶏小屋が襲われたのは、まいの調査によると、どうもゲンジが飼っている犬の仕業らしい。さらに、ある時はまいの畑の近くまで侵入して土を取りにきていたから、こりゃヤバイ。

必死になってゲンジのことを攻撃するまいをおばあちゃんはたしなめたが、それに

対してまいは、「おばあちゃんは私よりゲンジの方を大切にするのね！」ときつく反発してしまった。これでは、まいの魔女修行の成果はまだまだ……。

まいの決断は……？

パパが単身赴任していたのはママが仕事を続けたいからだったが、家族3人がバラバラの生活を続ける中、ママは仕事をやめてパパのところに行く決心をしたらしい。そこで今日は、パパがおばあちゃんの家に来て、「まいはどうする？」とやさしく問いかけることに。今晚ゆっくり考えて明日の朝返事を聞かせてくれとのことだ。

本来ならまだしばらくは大好きなおばあちゃんと一緒にここで過ごしたいのだが、折しもゲンジのことでおばあちゃんとケンカしたところ。まさかそれが理由となったわけではないだろうが、翌朝のまいの返事は「パパと一緒に行く」だった。決断自体はそれでいいのだが、さて、おばあちゃんとの間にあるわだかまりをそのまま残して出発するの……？

それから2年

それから2年。車の中のまいには、「私はまいのような子が生まれてきてくれたことを本当に感謝しているんです」というおばあちゃんの言葉や、「おばあちゃん、人は死んだらどうなるの？」との質問に「そうですね。おばあちゃんが信じていることを話しましょう」とやさしく答えてくれたおばあちゃんの姿が鮮やかに甦ってきていた。一刻も早くおばあちゃんの顔を見たい。そう願ったまいだったが、到着した時は既に遅かった。おばあちゃんの家にはあの大キライなゲンジも手伝いにきていたが、まいの姿を見てゲンジは「用事があれば何でも言ってくれよ」とやさしい言葉を。

思春期の少女の成長は早いもの。まして感受性の鋭いまいだから、中1から中3までの2年間の成長はきっと大きいはず。したがって、まいも今はそんなゲンジの言葉を素直に聞いたのでは……？

「おばあちゃんと2人だけにさせて」と言うママを座敷に残して台所に出たまいは今、素直な気持で大きな声で「おばあちゃん大好き！」と叫んだが、そこである奇跡が……。

こんな体験が大切では……？

梨木香歩の同タイトルの原作をスクリーン上にもってきたこの「ワンイッシュ映画」では、観客はゆったりと流れていく時間を共有するから、ある意味で単調だが心地よい気分になれることはまちがいない。また、おばあちゃんと孫が田舎で暮らす姿を描く映画は、韓国映画『おばあちゃんの家』（02年）（『シネマルーム6』284頁参照）などたくさんあるが、この映画の特徴は、ホンモノの外国人のおばあちゃんをキャスティングし、そのおばあちゃんが今の日本人が失ってしまった丁寧で美しい日本語をしゃべっていること。

都会では、時間に追われギスギスした人間関係の中でプレッシャーを感じている中学生が多いはずだが、せめて1週間くらいはこんな山の中で自然に接する体験をすることが必要だろうし、それが大きな勉強になるのでは……？

2008(平成20)年3月15日記